

第八 章

小野はそれまで、そぶりに他人に察せられたかも知れないが、嘗て一言と雖も、冬子嬢に對する戀心を、外へ發表したことがなかつた。假りに恩師の娘を、まだ師が死んで、百日経つか経たない中から、ひそかに戀ひ慕つてゐる。——その、見やうによつては故先生に對して、甚だ非禮な心根でもあつた上に、まだ先方の心の見究めもつかない中に、うつかり誰かに打明けでもしては、それが皆に知れ渡り、何か問題でも惹起して、先方からは警戒され、出入りを差止められでもすると、事が初めから壞して了ふやうな虞れがあつたので、いよくとなるまで、自分では飽くまで秘めに秘めてゐる氣だつた。

が、さうした思ひを、長く自分の胸一つに收めて置くことは、小野の性質としてできなかつた。殊にもう今では、馨子夫人の信任も益々加はり、冬子嬢も満更自分に對して、好意をもたないでもないことを確かめると、誰かにその思ひを訴へずにはられないやうな心持にもなつて來た。それを初めて打明けたのは、柳井に向つてであつた。

當時鎌倉にゐた柳井は、毎週土曜日になると、自分の勤めてゐる横須賀の學校の課業を済ませて、必ず東京へ歸つて來る習慣になつてゐた。彼はその六日間の講師の勤めと、それから歸つてもひとり

で讀書したり創作したりする孤獨から、友に飢を談笑に渴えてゐた。で、毎土曜の歸へる日毎に、彼の下車する新橋停車場に近い新聞社にゐる池田を訪ねたり、本郷の小野や杉浦の下宿へ寄つたり、或ひは會合の場所を約束したりして、落合つて語り合ふのが常となつてゐた。

その日も、柳井は小野に葉書をよこして、本を買ふ序があるから、神田の中西屋で落合はうと、豫打合せがしてあつたので、小野は約束の時間を見計らつて、そこへ出かけて行つた。そして買ふともなくその陳列棚にある洋書類を見散らしながら、柳井の來るのを待つてゐた。が、柳井はなかなかやつて來なかつた。小野が殆ど一通り、その文學書類の書棚を調べて、四五冊わざ／＼抽出して序文などを讀みながら、時間を消してゐたにも拘らず、約束の五時がもうとうに過ぎたのに、彼は例の細長い姿を見せなかつた。小野は止むを得ず一處にゐて、店員に訝られないやうに、廉い本や雑誌の並べてある臺の方へ行つたり、叢書類の揃へてある棚の間に隠れるやうに潜んだりして、表の扉の開く度に、柳井の來るのを待つてゐた。戸外は二月終りのまだ少し強い風が、夕暮の停留所に立つた人を、黒く寒げに吹き捲くつてゐるらしかつた。

その中にやうやく、柳井の黒く細長い洋服姿が、つと斜に衝き入るやうに、入口の大きな硝子扉を開いて店の中に入つて來た。彼は鳥渡立付つて、尖つたやうな鋭い眼を上げ、店內をぐるりと見廻したが、小野をすぐ近くの和書陳列臺のあたりに見出すと、ひよいと會釋をして、つか／＼近寄つて來た。小野も進み出て、少しは恨むやうに云つた。

「やあ、遅かつたね。」  
 「うむ。失敬。新橋で下りてから、鳥渡愛宕下へ寄つてきたのでね。遅くなつて済まなかつた。——ちやあ鳥渡待つて呉れ給へ。直ぐ用を済まして來るから……。」

かう云ひ乗ると、彼は肩を聳やかしてつか／＼奥へ行つたが、例の文學書類を並べた本棚の前へ立つと豫々見當をつけて置いたらしく、一冊の本を手早く抜き取り、更に敏く目を走らせて、その邊で應いて、そして少し忙しく訊ねた。

「おい、君、君。この間のルメートルはもうなくなつたのかい。」

「さうか。そいつは残念だつたな。一週間位大丈夫だらうと思つて、この前の週に買はないで置いたんだが、やつぱり賣れつちまつたか。讀みたかつたんだがな。——ちやあ仕方がない。このフレンチ、

ポートレートだけ貰つて行かう。」

「左様ですか。どうもお氣の毒さまで……。」

小野はその柳井の、讀書慾に満ちたといふのか、愛書癖に富んでゐるといふのか、兎も角も如何なる際でも、讀書と學問とを忘れない生活状態を、傍から見ても、この頃冬子嬢に對する思慕のたかりでなく、その頃もう創作の方でも、精進の態度が目に見えてゐた。そして小野は恐らく思ふやうに書けない焦慮とで、毎日も羨ましく柳井を眺めなければならなかつた。

「相變らず勉強だね、君は。よくそんなに讀書をする暇があるね。」

小野は後から蹤いて行つて、そんな風に云つた。

「いや、この頃はすつかり不勉強だよ。學校も忙ししいし、小説も書かなけれやあならないし、いろん

な俗用があるんでね。この間からやつとバルザックの評傳を、一冊讀んだつきりだよ。僕はどんな時でも本を傍に置いてないと、何だか淋しいやうな氣がするんでね。謂はゞ本が僕の生活の支柱さ。丁度、君に於ける戀の如きものだね。」

柳井はひよいと頷を上げて、擲諭ふやうに云つた。

「何だつて。——それは兩方とも君だらう。」

小野は思はず鳥渡賑くなつて反問した。彼は柳井が、もう彼の最近の冬子嬢に對する心持を、薄々知つてゐるのかと思つた。が、併しそれは柳井がいつもの、警句に過ぎないのかも知れなかつた。

果して柳井は、さう深い意味をもたせたものでもないらしく、軽くその反響を受け止めた。

「さうかも知れないね。兎に角、僕にもいろんなことがあつて困るよ。いづれ後で話すがね。……ちやあ出ようか。」

「出よう。」

本の包みが出来上つたので、そこで二人は中西屋を出た。戶外へ出て見ると、夕風はさほどでもなく落ちて、冷たいピンとするやうな空氣の中で、街々の燈火は洗はれたやうに、煌々と輝きを迸らせかけてゐた。頬にひりりとする程寒いが、快くからりとした晩冬の夕暮だつた。まだ西の空は、屋根々々の上にかつと明るく燃えてゐた。

「少し歩かうか。」

「うむ、歩かう。」

二人は蒼茫と暮れかゝつた、灯火の割りに少い、お茶の水の方へ向つて歩き出した。

「その後どうしたい。何かあつたのかい。」

小野は途中いり／＼の話の末に問ひかけてみた。柳井が、毎もに似げなく、何か焦々してゐる様子で、話に纏りや落着きのないのが、小野に鳥渡不審を起させたのだつた。

「うむ。その後少し弱つたことができてね。當然の罰だとは思つてゐるが、心配でならないことがあるんだよ。」

柳井は通り過ぎる人の、もう見定め難いぼんやり白い顔を、鋭く見返すやうにしながら、少しかすめた語調で話し出した。

「ふうむ。何だい。それやあ、例の『花火』の方の口でかい。」

「いや、さうぢやないんだ。『花火』の先生なんぞの方なら、どちへ轉んだつて、商賣だから何でもないんだけれどね。君なんぞのまるで知らない、全然違ふ口なんだよ。それで一つには大いに弱つてゐるんだ。」

「へえ、そんな口が、まだ外にも在つたのかい。氣の多い奴だな。」

「全くいろんな口が多過ぎるんでね。それでつい間違ひができるんだよ。」

柳井は吾と吾身を嘲笑するやうに、また小野を逆襲的に揶揄するやうに、そんな口をきいた。

「一體何なんだい、その心配つていふのは。何か家へでも知れて、それで面倒でも起きたのかい。」

「うむ。まアさう云つたやうなことだがね。家へ知れたんぢやないが知れやしまいかと思つて、それで心配してゐるんだ。そのことが家へ知れて、民子——彼の許婚——の方へでも響くと、僕はそんなでもないが、彼女に可哀さうだからね。」

柳井はまたわざとそんな風に云つて、自分を冷笑するやうに笑つた。

「ふん。成程、君のやうに家の方を、少しも抜目なくうまく取繕つてゐると、さうした悲劇もあるん

だね。」

小野はさうは云つたものゝ、この伶俐な柳井が、嘗て一度も家の人々に對しても、また友人などに對しても、襤褸一つ見せたことのないのに、そんなに自分に弱つた態度を見せるのは、可なり困つたことに違ひないと思つて、心の中では同情してゐた。

「實はね。」と、柳井は思ひ餘つたやうに、たうとう告白し出した。「君にも誰にも知らせはしなかつたけれどね。僕の愛宕下の姉の家に、鳥渡可愛い女中がゐたんでね。まだ僕が大學にゐた時分からだに僕に好意を見せたからなんだがね。僕が行つてゐると、何とか彼とか云つちやあ、僕に近づいて話しかけたり、臺所や縁側にゐても、頻に唱歌を唱つて聞かせたりしてね。何でも何處かの女學校に中途までゐたとかで、當人としてはそこの教育のない普通の女中とは違ふつてことを、僕に示したかつたのだね。そして僕が食べ残した氷水なんぞを、そつと喜んで飲んだり、僕の脱ぎ棄てた外套に頬擦りしたり、何彼につけちやあ、僕に好意を表すのでね。僕も、つい相應に可愛い娘でもあるし、さうまでされると、悪い氣はしないものだからね。何時か何うかした拍子に、二人つきりになつた時、その場のハズミで、鳥渡接吻して了つたんだよ……。」

「ふうむ。」

「そしたらね。どうもその女がね。その後も本氣で僕のことを、何とか思つてゐるらしく、姉たちが相應の家へ嫁づけようと思つて、いろ／＼縁談を勧めるけれどもね、それを片つばしからぼん／＼斷つて了ふんださうだ。中には随分いゝ家から、特に望まれた身に餘るほどの口があつても、どん／＼拒絶して了つたんだつて……。」

「ふうむ。そしてその際、君のことを何か云ひでもしたのかい。」

「いや、それは何とも云はなかつたらしいが、僕はそんな話を聞くたんびに、何とか僕のことを、云ひ出されやしないかと、胸がひやく／＼してならなかつたんだ。ところが殊に最近になつてね、それが愈々ばれさうな事件が生じてきたんだよ。」

と、柳井は小野の方を見ずに、正面の街の遠い灯を、呆やり眺め棄てながら、告白の言葉を進めて行つた。

「と、いふのはね。近頃になつて其女が、僕と民子と、愈々結婚をしたといふことを姉から聞き知つたらしいんだ。そして姉には、何とも云はなかつたらしいが、他でもない今日先刻ね、僕が新橋で下りて、鳥渡用が在つたものだから、愛宕下へ寄つたらね。丁度折悪く姉夫婦が留守で、その女中たつた一人つきりゐたんだ。そして僕の顔を見ると、妙に興奮した調子で、頻に話があるから上れつて云ふのでね。僕は別に氣にも止めず上つたんだよ。……」

「ふうむ、すると？」

柳井が鳥渡云ひ淀んだので、小野は興味をもつとともに、告白を易くする心遣ひで、かう促さずにはをられなかつた。

「するとね。いきなり僕の胸に絶りついてね。結婚した話は本當かつて訊くんだよ。僕もさうなつては仕方がないから、實はもう半年も前から、家と家とで定めて了つて、仕方がないからつてさう云つたさ。すると向うでは、やはり僕と結婚し得る位に、初めから思つてゐたらしいんだね。さうとは知らなかつたから、今まで貴方のことを頼りに思つてゐたつて、急に泣き出して了つてね。終ひにはお定まりの訛されたの、弄ばれたのつていふ調子で、この上は僕と其女との中を、有無に拘はらず、

姉や家の人たちに云ひつけるつて迄云ひ出すんだ。僕も弱つちやつてね。仕方がないから、そんなことを云ひつけられでもしちや大變だから、そんな短氣を決して起してくるな。決してお前は厭ぢやないんだが、家と家とで定めた結婚で、それにはいろ／＼断り切れない事情もあるんだから、お前がさうまで思つてゐてくれたことは僕として如何にも氣の毒だが、どうか是までのことと諦めてくれつて、月並だが仕方がないから、言葉盡して謝まつたんだよ。それでまあ、その場はどうやらかうやら納得した様子だつたから、まあ安心して、這々の體で逃げて歸つたんだがね。ほんとに弱つたよ。つい鳥渡したハズミで、餘計な接吻なんぞして了つたものだから、こんな目に會つちまつて、僕は心配でならないんだよ。あの場はあく／＼して納まつたものゝ、いつ何時あの女に、姉にでも告げ口されやしまいかと思ふとね。たつた一度接吻したきりだけれど、そんなことが家へでも判ると、僕はすつかり面目を失つて了ふからなア。……」

柳井はもう四邊に迫つた薄闇の中で、その秀でた肩を擧めた。

「へえ、そんなことがあつたのかい。成程それやあ君にとつちあ、可なり困つた問題だらうね。だが僕から云はせれば、何でもないぢやないか。その位のこととは、若き日の咎として、たとひ君の家へ知れたところが、大目に見て呉れるだらう。要するにそれは君が、色んな女に惚れられて困るといふことに過ぎないぢやないか。」

小野は柳井の告白を聞き終ると、かう慰めるやうに云つたが、さう云ふともにも、自ら柳井の惱みと自分の煩悶とが、對照的に考へられた。そして平常決してそんな自分の失敗の告白などをして、弱い尻を友人にでも掴まへさせたことのない柳井が、さすがに二人の胸に収めかねて、自分にかう打明けられたのを聞くと、自分のもつてゐる惱みをも、柳井に打明けないではをられないやうな、一種

の衝動を心の中に感じた。

柳井は猶ほも云ひ續けた。

「それはさうかも知れないけれど、僕の家には君も知つてゐる通り、僕を飽くまで信じてゐる、清教徒の叔母がゐるからねえ。その耳へでも入つたら、全く何といつていゝか解らないからね。それに考へやうに依つちやあ、女一人の運命を、全く僕が弄んだことになるからねえ。罪惡に感ぜざるを得ないよ。——あゝあ、考へると、厭だね。」

「厭だらうが、當然の罰だと思つて、その位の自責は甘受するさ。さうして堪へてゐれば、事實は案外うまくゆくかも知れないよ。外部的に云へば高がまア、家に知れなければそれで済むんぢやないか。内部的の君の精神上的の苦悶なんぞは、要するに心の試練に過ぎないかも知れないからねえ。」

小野はそんな風に、慰撫するより外に仕方がなかつた。

「さうだねえ。ほんとにさうだ。ゲーテも、何か道徳的な罪を犯しちやあ、その自責の念に迫られて、種々な傑作を書いたんださうだからねえ。」

「さうだ。僕から見れば、君のそんな煩悶なんぞ、寧ろ物語のやうにしか聞えないよ。僕なんぞに比べると、寧ろ幸福だ。僕なんぞはもつと空漠たる戀に、たゞ一人で焦慮してゐるばかりなんだからねえ。」

小野はそんな風に、柳井の告白に釣られて、自分の胸の中を打明けたくてならなかつた。

「何だい。君にもそんな問題があるのかい。」

柳井も、自分の告白が終ると慰められたともなく幾らか心が落着いたと見えて、聴くも小野の顔色を見てとつた。

「うむ。僕も疾うから君には、第一に打明けて相談しようと思つてゐただけだねえ。未だに決心が定まらないので、一人そつと心の中に秘めて置いたんだがねえ。この頃ぢやあ何だか、もう一人で秘めて置くに堪へられなくなつてきたんだ。」と、小野は柳井の顔を鳥渡取かしげに見ながら、遂々云ひ出した。「實は勝見先生のお嬢さんに就いてなんだがね。」

「ふうむ——。」

柳井も此方を振向いて、ちつと小野の顔を見た。

「僕は疾うから、あの一番上の冬子さんに、好意を感じてゐたんだがねえ。この頃ではそれが當じてきて、どうにもならないやうになつて了つたんだ。で、そんなことをするのは、まだ早過ぎると思ふけれど、いつそ思ひ切つて打明けるなり、奥さんに結婚の申込をするなりして、當つて碎けたい位に思ふんだよ。」

小野は少しの恥かしさと、熱情に頬を燃して云つた。

「ふうむ。さうか。——そんなことだらうと、僕も薄々は察してゐたがね。もう、そんな風になつて了つたのか。君は惚れつぽいからね。そしてあゝいふお嬢さんのある家庭に、近づき馴れてゐないからね。そんなことになりやしないかと思つて、僕も心配してゐたんだよ。」

柳井は夜目にも、蒼白な冷靜な顔で、かう批評的に云つた。

「だが、もう僕も、思ひ切れない所まで行つちまつたんだから、仕方がない。かうなるまでに、實はこれでも一生懸命思ひ切らうとして見たんだがね。思ひ切るにしても、いつそ當つて碎ける外ないことさへ思つてゐるんだ。どうだらう、客觀的に見て、僕には逆もあのお嬢さんと結婚し得る望みはないかしら。」

「そんなことはあるまい。先生の家だつて、君とさう身分が違ふつてほどのことはないからね。けれども、そんなことよりも、僕から遠慮なく云はせれば、少し時機が早過ぎやしないかい。」

「それは僕もさう思ふ。さう思へばこそ僕も、一生懸命抑制したんだけれどねえ。僕にとつては、もう早過ぎるなんて、云つてゐられないやうになつて了つたんだ。」

「さうか。そいつは仕方がないね。」と、柳井は微笑して、そして更に突き込むやうに云つた。「だが、そんならもう一つ遠慮なくいふが、君は冬子さんに、先生のお嬢さんだから惚れたんぢやないかい。まさかお嬢さんそれ自身といふよりも、先生のお嬢さんだからといふ、定冠詞に惚れたんぢやならうね。——少くとも世間は、さういふ風にとるかも知れないからね。」

「さうだ。」小野も、幾らか断乎として答へた。

「さう思つたから僕も、その點に就いては、十分自省してみた。お前は先生のお嬢さんといふ名にひかされて、または光榮ある先生の家へ入りたいたために、そんな野心を起したんぢやないかと。併し、僕はその點に就いては、はつきり云ひうる自信をもつたよ。成程、それは先生のお嬢さんといふ名や、それに附屬したものに心ひかれなるとは絶対に云ひ切れないけれどね。僕はその人が平の娘さんだつてやつぱり好意を感じたべらうと思ふ。といふのは、僕はあの人に會つてゐると、恥かしいが、生理的にも、愛の衝動を感じてならないんだ。こんなことを云つたら、君は笑ふだらうと思ふが、さういふ名や光榮に對しては、まさかそんな氣は起さないからね。僕は先生のお嬢さんだから、今迄あくまで思ひ切らうとしたり、躊躇したりしたんだ。そして今では、そんな非難に面して立つても、仕方がない決心してゐるんだ。」

「さうか。成程。」と柳井も少し微笑を堪へて、同感するやうに點頭いた。「さうまで思つてゐるなら

それで結構だらう。だがそれは君が、君だけが一人さう思つてゐることで、向うの冬子さんはどう思つてゐるのだい。何か、君の方に有利な態度でも見せたのかい。問題は、歸着するところ、そこだらうと思ふがね。」

柳井の明晰な頭腦は、順次に問題をさういふ風に解剖して行つた。

「うん。それがなければ、僕だつてかうも思ひ詰めはしない。果してどの位重大にとつていゝかは知らないが、その一例として挙げれば、僕は冬子さんに手を握られた。——丁度先生の埋骨式の晩のことだがね……。」

小野はさうして稍詳しく、その夜のことを語つて聞かせた。

柳井は幾らか興味をもつて、『うむ、うむ。』と聞いてゐたが、聞き終ると、少し考へるやうにしてそして云つた。

「ふうむ。そんなことがあつたかい。處女が若い男の手を握る。考へやうに依つては、可なり重大な問題だね。——冬子さんつて人は、そんな人かね。」

柳井は少し誇張もあつたらうが、圍の中で眉を擡めたらしく、不服さうな語調を加へて云つた。「ひよつとするとまるで無邪氣で、そんなことをしたのかも知れないが……。」

「いづれにしても僕は好かんね。それは僕がその當人に惚れてゐればそんなことをされたら或ひは嬉しいかも知れんが、少し理性的に批評すると、甚だ性のよくない振舞ひだと思ふね。一種のコケットぢやないか。若し無邪氣でやつたにしても、あの人だつてもう十九だらう。十九にもなつて、そんなことを無意識にするとすれば、何か缺陷があるとしたか思へないよ。いづれにもせよ、僕なら不賛成だね。兎に角君に好意を示したに違ひなからうが、そんな人だとすれば、君も考へ直した方がいゝと思

ふね。」

「さうかねえ。」が、小野は柳井の冷静な批評に、驚きと共に一種の不服をさへ覺えた。小野には、その事實が彼の希望を最も繋いでゐたものだつただけに、そんな批評を受けける餘裕もなかつたのである。「僕はさうも思はないが。……さうかねえ。僕はたゞあの人が極めて素直に、さういふ好意を示してくれたものとして、益々あの人のいふ所を見せてくれたやうに思ふんだかねえ。」

「それはさう見るのが穩當かも知れない。」と、柳井は良友の冷静を以て、さう深くは立入らないと、もに、親愛を以て肯定した。「さういふ批評を加へうる餘地が、冬子さんの人格上に在ることだけは、君も念頭に置いた方が、萬全の策だと思つたからね。」

「有難う。だが、それは君の杞憂だよ。あの人の人格に、そんな悪い所なんぞありはしないよ。」

「さうまで思つてゐるんなら仕方がないさ。まあ遣る所まで遣つて見るんだね。さうなれば僕も、君のために及ばずながら盡力するよ。」

柳井は問題を突つ放しながらも、同情ある態度を見せた。

小野はそれに力を得て、更に本論に入り出した。

「どうだらう、僕は近々奥さんに冬子さんを下さるやうに、お願ひして見ようと思ふんだがね。當人に先に打明けて、ひそかに語り合つたりしては、却つて事を壞すと思ふからね。公明正大に奥さんに打明けて、奥さんの許しを受け得られるものなら受けた方が、策としてもいゝだらうと思ふがね。」

「するなら、さうするのが一番いゝだらう。僕もそれに賛成だ。だが、それにしても、時機の問題だね。時機は十分考へなくちゃいけないよ。まあ、ゆつくり時機を待つんだね。さうすれば或ひは、奥

さんは君を可なり信任してゐるやうだから、或ひは思ひがけなく向うから望んで呉れないとも限らぬ。僕もその中には、適當な時機を見て、奥さんにそれとなく話してもいゝからね。」

「さうかい。どうも有難う。君がさうしてくれれば、眞實に感謝するよ。僕も出来るだけ時機を待つ積りだからね。」

「さうし給へ。——僕の濁つた煩悶と違つて、君のは清い希望に充ちてるんぢやないか。」

柳井はわざとさうした氣障めいた感傷的な言葉を使つて、小野に勇氣づけた。

「どうか——。」

二人はもう疾うにお茶の水を過ぎ、暗い順天堂病院の横をぬけて、灯火の賑やかな本郷通りへさしかゝつてゐた。

## 二

小野が杉浦に打明けたのも、それから間もなくだつた。

小野と杉浦とは、常に勝見家に於て、行動を共にしてゐた。どちらかといへば小野の方が、幾らか主となり杉浦の方がそれに従いて行く形で、殆ど異心同體のやうに動いてゐた。全く小野なしには杉浦は、さう勝見家の人々たちに親しくなることもできなかつたに違ひないのだ。——さういふ關係だから、小野は杉浦にこそ第一に、彼の冬子嬢に對する戀を打明けるべきだつた。打明けて援けを乞ふべきだつた。が、二人は毎日必ず一度は、訪ねて行くか來るかして、相會うて互に創作の話をしたり、世間話をしたりしてゐる間に、勝見家のことに就いては、必ず何か話し合ふのが常であつたに拘はらず、小野は嘗て一度もそれをほつきり杉浦に打明けたことはなかつた。

それは第一に、親し過ぎるほど親しく、日夕顔を合してゐるので、今更らしくこと改めて、そんなことを打明けるのが、何だか妙な気がしたからでもあつた。それから又第二には、戀するものゝ敏感で、いつか自づと杉浦に、漠然たる敵手意識を感じてゐたせゐでもないとは云はれなかつた。

小野はまづ第一に、杉浦も亦冬子嬢に、同じ思ひを抱いてゐるかゝるまいか、それをひそかに知つた上でなければ、迂闊には打明けれない気がしてゐた。若し杉浦が同じ思ひを抱いてゐるとすれば、彼を一種の苦惱に陥れるばかりでなく、或ひは競争の念を生じさせて、此方の邪魔をされないと計られなかつた。そしてそのために、二人の仲が不和にでもなつては、心弱い小野として堪へ得られないことだと思つた。

だから小野は日常の素振りでも、それとなく仄めかしはすることがあつても、はつきり打明けないでゐた。そして時機を待つてゐたのだつた。

が、この頃になつてみると、杉浦も冬子嬢と親しむには親しんでも、それ以上積極的な態度に、出たがつてゐる様子もなかつた。そして冬子嬢とても、杉浦に親しむは見せてはゐるが、彼にそれ以上のことを要求してゐるとは見えなかつた。その點の好意は寧ろ小野自身の方へより多く示してゐるやうにさへ思はれてきた。

その上、小野はもう一人思ふに堪へかねて、柳井に打明けて了つた後だつた。かうなつてはどうしても、最も親友である杉浦に、打明けない譯にはいかなかつた。もうかうなつては何れにもせよ、杉浦に打明けて相談し、お互に意中を話し合つて、杉浦が冬子嬢を親愛の念以上に、何とも思つてゐないならば、快く助力をして貰ふやうに頼み、また若し冬子嬢をひそかに戀してゐるとすれば、それを諦めて譲つて貰ふなり、または此方で譲つてやるなりしなければならなかつた。どちらにもせよ杉浦に秘密で、出し抜いて少しもことを運んでは、平素の友誼に對しても、甚だ濟まないことだつた。

若しそれに依つて、杉浦が非常に苦しむやうならば、そのときは自分の思ひを泣いて斷ち切るとも、まづ打明けて相談すべきだと思つた。

柳井に打明けた後、小野は益々その決心を固くした。そしてできるだけ自然に、杉浦に云ひ出すべき時機を待つてゐた。

その時機は、それから二三日ならずして來た。

或夜、小野と杉浦とは、杉浦の下宿で、例に依つて晩くまで話し合つた。二人は毎日會つてゐながら、少しも話題に窮しはしなかつた。話がなければ、二人とも黙つて、てんでに何か考へてゐても、それでもよかつた。話がなければ、困るやうな友人關係ではなかつた。それでその夜も、六時頃からもう十一時近くまで一緒にゐたのに、別に話し盡して飽いたといふやうなことはなかつた。それに小野には、例の話をいつかは打明けたいと、心の中でひそかに待つてゐるだけに、何だかまだ話し足りなかつた。別れるのが惜しかつた。

が、もう彼是、時間は十一時を過ぎてゐた。で、小野はやうやく尻を上げるやうにして、そして未練らしく云つた。

「ぢやあ、もう歸らうかな。——だが、どうだい。一緒に鳥渡出て見ないか。寝る前に、夜の街を少し散歩するのでもいいぜ。」

「さうだね。出て見てもいいね。何だか少し鬱屈したから。それに少し腹も減つた。」

杉浦も、冴えない調子ながら、すぐさう應じた。彼も亦、その儘一人ぼつりと下宿に残されるのが、あんまり氣持がよくないらしかつた。



「ぢやあ出よう。」

「出よう。」

杉浦も立ち上つた。

「まア今時分また御散步ですか。」

二人は下宿の婆さんに目を睨られつゝ、睨い暗夜の中へ出た。戸外は雨氣を含んで闇が濃く、木の葉が重く垂れてゐるやうな、いやに靜かな晩だつた。暗い横町から表通りへ出ても、もう街の商家は大抵戸を下して、數少になりつゝある燈火の影にも、壓迫されたやうな靜けさが激んでゐた。

二人はその自然の氣配に感じたのか、もうさし當つて話し合はねばならぬこともないのか、兎に角むつとり黙つて歩いた。杉浦は夜更けの散歩に相應しい、憂鬱な顔をしてゐた。小野も心の中に憂ひを抱いた人のやうに、思ひ沈んで俯向き勝に歩いてゐた。

「藪へでも入らうか。」

「うむ。よからう。他は何處ももう駄目だらうからね。」

そんなことで二人は更に暗い藥師の境内を抜けて、その鳥渡有名な蕎麥屋へ上つた。夜の雨氣の加減か、それも靜かだつた。二人は靜かな二階へ上つて、そして一間だけ離れてゐる、小さい別室の方へ通つた。廣い方にも殆ど客はなかつた。

二人はそこで食べ物と少量の酒を命じた。

その中に、小野は靜かな夜氣と、少しの酒精のためか、何だか心が妙に感傷的になつて來た。そして眼の前にはちつと坐つてゐる言葉少の杉浦をとらへて、もう胸にあることをすつかり打明け、彼の身體を揺ぶつて訴へたいやうな氣持になつた。——先刻から、今夜こそは云つて了はう、と、ひそかに

心に思つてゐただけ、その衝動は可なり強かつた。

小野はたうとう、機を見てかう云ひ出した。

「ねえ杉浦。——僕は君、あの勝見さんの、冬子さんが好きなんだがね。向うでさへ許して呉れれば、僕は結婚したいと思つてゐるんだがどうだらう。」

小野は心の中で、その打明ける言葉を、澤山に種々考へてゐたけれど、最初は結局それだけで云ひ切つて了つた。

杉浦は不意に、小野にさう云ひ出されたので、細い眼を心持見開くやうにしながら、落着いた調子で反問した。

「どうだらうとは？」

「君はどう思ふ。僕が冬子さんに申込んでも、逆も望みはないだらうかね。」

「そんなことはあるまゝ。」

杉浦は鳥渡眉根を上げて云つた。

「併し君はどう思ふ。僕がそんなことをするのを不賛成ぢやないかね。」

小野は少し熱して、疊みかけるやうに云つた。が、杉浦は落着いてゐた。

「そんなことはない。どうして？」

「どうしてでもないが、僕は君が、僕と冬子さんとがそんな風になりでもしたら、苦痛でいもあると困るからね。君は萬一僕がそんな風になつても、苦痛ではないかい。君はあの冬子さんのことを、どうか思つてゐるといふやうなことはないかい。」

小野は更に疊みかけて訊いた。

「うむ。それは僕だつて、あの人には親しみを感じてゐる。が、今のところ、それ以上のことは何もない。あの人も僕には、僕相應の好意を示してくれるので、僕は嬉しいとは思つてゐるが、君のやうに結婚までしようとなんぞは思つてゐない。だから、君があの人に結婚を申込んで、別に苦痛なんぞ更にないよ。」

「ほんとは何でもないかい。」小野は更に膝を進めて、少し無然としてゐるやうな、併し表情のよく分らない杉浦の顔を見返した。「僕は、君が何でもないのなら、安心してことを運ぶことができるがね。君に少しでも苦痛を興へるとすると、僕は考へ直さなければならぬと思つてゐるんだ。」

「今のところ、何でもない。尤も、これから先のことは、分らないがね。」

杉浦はさう云ひながら、少し揶揄ふやうに、小野の方をにやりと笑つて威嚇した。

「さうか。そんならまた安心した。ぢやあ頼むから、どうか僕のために、このことが成り立つやうに援けてくれ。ほんとに苦痛でないなら、ね。」

「うむ。次第に依つては盡力してやらう。が、併しその問題を實行するとなると、種々まだ考へなければあいけないぜ。よく考へてしないと駄目だよ。それやあ僕も盡力はするけれど、君も考へてからにしないとけないよ。」

杉浦は頻にさう勧告した。

「うむ。それは僕も時機をみて、奥さんにお願ひしてみるつもりだがね。兎に角、君がさう云つてくれたので、僕も安心した。ぢやあほんとに宜しく頼むよ。」

と、杉浦はまた意地悪く、にやりと笑ひながら、恐るべき冗談でかう云つた。

「それやあ盡力はするがね。盡力して、君たちを一緒に置いて置いて、先生の『そのうち』にある臺輔

のやうになると困るからなす。」

その主人公は、自分の盡力で二人を結婚させて置いて、そしてその後、その女に戀をしてゐたのを知り、かつ現在の餘り幸福でない境遇に同情して、自分が盡力して一緒にしてやつた良人から、その女を奪ふことになるに至る。……先生の小説の中でも、最傑作のものだつた。

「そんなことになつちや大變だ。」

小野も、さりげなくは笑つたが、何だか一抹の暗翳を、自分の運命の前へ投げられたやうに、そのときから凶い感じを受けざるを得なかつた。

そのとき、どやくと階段を上つてくる、他の客の足音がしたので二人は黙つて了つた。そして思ひ／＼に、その問題を考へてゐるらしく、外の方へ視線を向け合つてゐた。闇の中に静まり返つた、下の庭の四つ手めいた植込は、灯影を受けて半面であつてゐたが、後はしんと葉を垂らしてゐた。

「もう出ようかね。」

暫らくして杉浦が云つた。

「出よう。」

戸外へ出て見ると、闇の中から冷たい雨が、ぼつ／＼と、ぼつ／＼と落ちて來た。二人は足を急がせた。が小野は何だかその雨が、熱した頬に當るのを、快いと感ずるやうな興奮に囚はれてゐる、自身を發見しなければならなかつた……。

もうかうなつては、小野にとつてそれは全く時機の問題だつた。そしてその時機は思ひの外に早く

来た。

それには、もう一つ冬子嬢の好意が、小野にはつきり解つたやうな事實が、その前にあつたからだつた。その事實といふのは、三月三日の、彼女らの雛祭の晩のことだつた。

その夜は、勝見家の令嬢たちの勉強部屋に當てられてゐる、例の離室の一室に、雛段を飾つて祝ふから、それを見に来いといふ招待が、前から冬子嬢から小野たちに傳へられてゐた。小野も杉浦も、喜んでその夕を待つてゐた。それで、小野は夕方になるのを待ちかねて、杉浦を誘つて出かけて行かうと思つた。すると杉浦は、何か用事があるとかで、芝の白金にある彼らの友人の、川瀬といふ銀行家の邸へ招かれて行つてゐなかつた。それで小野は一人で勝見家へ行かねばならなかつた。併し彼は、行つてみて一人で来た幸福を、感謝するやうな事實に出會つた。

小野が行つたとき、冬子嬢はもう疾うから待つてゐたらしく、玄關から入つて行くと、彼女の方も早く急いで迎へに出て来た。

「あら、やつぱりさうだつた。——貴方を持つてゐたのよ。」

彼女は親しげにそんなことを言つて、座敷の方へ導き入れた。そして小野が、夫人に挨拶を済ませるか済ませない中に、

「小野さん。もうちゃんと飾つてあるのよ。だから早く見いらつしやい。」

と、勧めてやまなかつた。

「さうですか。ぢや兎に角、貴女がたの祕藏のお雛様から、まづ一見して來ませうかな。」  
小野も夫人の手前、さうすぐ立つ譯にも行かず、そんな風に云ひ譯しながら、内心は喜んで立上つた。

「さあ、ぢやあ此方から行きませう。早くいらつしやい。」

彼女は雛祭の浮々した気分と、待ちかねてゐた氣持とで、猶も早く見せたがつた。

小野は冬子嬢の勧めるまゝに、その臺所口から、庭下駄を突つかけて、離室へ行かうと下り立つた。冬子嬢はもう先に立つてゐた。そして二人は相前後して、そこから庭を横切らうとしてゐた。

と、臺所口を少し離れると、冬子嬢はふと立停るやうにして、後の小野を顧みた。そして、もう暮れそめた夕闇の中で、仄白く微笑しながら、

「さ、早く行きませう。」と、また促した。そして、小野が近づくの待つて、ひたと寄り添ふやうに左へ並びながら、庭下駄を僅か爪先へ突つかけてゐるために、やゝもすれば歩き遅れさうになる小野を、援ける積りかどういふ積りか、不意に小野の背筋の下へ、彼女の右手を廻した。そして半ばは小野を抱へるやうに、半ばは自分の身をもたせかけるやうにして、離室の方へ進んで行つた。小野はまたこの、思ひがけない動作に、鳥渡氣が轉倒するやうな心持を覺えた。そして喜びに胸を蕩かせながら、三四間ある庭の空地を、冬子嬢と夕闇の中をもたれ合つたまゝ、黙つて歩いて行つた。そして一時の發作的行動にもせよ、またたゞ單なる親しみから出る惡戯にもせよ、さうされたことは、彼女の好意を示すものとして、ひそかに胸を躍らさずにはゐられなかつた。

離室の入口が近づくと彼女は手を放して、先にあたふたと駆け込んだ。入つて見ると、もうその奥の雛の間には、他の妹たちや弟たちがもうすつかり、集まつてゐるところだつた。

雛段は、その床の間から掛けて、五六段高く、胡毛氈を以て調はれてあつた。そしてその上には、一番上の可なり大きな内裡雛を初め、三人も四人も姉妹があるだけに、夥しい雛の数が、五列に陳んで美しく飾られてあつた。

小野もすぐ應じた。そしてまた母屋まで歸る間、前のやうな状態になりはしまいかといふ希望が、彼の胸に轟いて湧き上つた。

二人はまた相連れだつて、離室の口を出た。と、今度は、後になつて下駄を穿いた冬子嬢を、小野は鳥渡待つやうにして立侍つた。そして立侍りながら、彼は彼女が前のときのやうに、自分に寄り添ふかどうかを、心待ちに待つた。今度又寄り添つて来れば、彼女は必ず自分に好意をもつてくれるに違ひない。そんなことが咄嗟に頭の中で考へられた。

すると彼女は、又急いで小野に追ひつくと、果してもう一度先刻と同じやうに、彼の背に手を廻した。そして又擁へるやうにして、押しやるやうに道を急がうとした。たゞ違ふところは、今度は何も云はなかつた。

小野は再び、今度はまた豫期してゐながら、豫期の通りなのに驚き、かつ胸を轟かせた。そして今度は彼も、思ひ切つて片手で、その小野に捲きつけた手首をとつて、その儘引張るやうにしなから、夢心地で先へ駆け出すやうにした。そして臺所口が近づくと、二人は又すぐその手を放した。

それから奥の間で、彼は又冬子嬢のお酌で、祝ひの白酒を二一杯と更に清酒を二合飲ませられたが、何だか味も何も分らなかつた……。

そんなことが在つたので、機さへあればすぐにも、小野は夫人に打明けて、結婚の許しを乞はうといふ決心は、彼の念頭を離れなかつた。そしてその機を、今かくと待つてゐた。が、さすがに幾ら厚顔の小野でも、強ひてその機会を作つて、云ひ出さうと目論む勇氣はなかつた。たゞ彼は、何か夫人の方から、さういふキツカケを、與へられるときを、只管待つより外はなかつた。

併し、たうとうその機会が來た。それは三月末の、或る小野が勝負家へ宿直に當つた晩のことだ

つた。

その夜、夫人もどうした加減か、非常に感傷的になつてゐた。二人は毎もの通り、先生の寫眞の安置してある、書齋の奥の机の前で、四方山の話を楽しみながら、夜の更けるのを知らなかつた。

すると何かの話から、夫人はだん／＼こんなことを云ひ出した。

「……小野さん。貴方は確か御次男だつたわねえ？」

「え、さうです。兄貴が一人をります。」

小野は夫人が、どういふ積りでそんなことを訊ね出したのか、分らぬながらに答へてゐた。

「さう？　ちや御自由な身分だわね。家の方に何にもしなくたつていゝんでせう。」

「え、まあいゝんです。ひよつとすると、お母、位養はなくちやならないかも知れませんが、それも北海道の兄貴の處にゐてくれれば、それでいゝのです。だから自由です。それで一つはこんな文學なんて、危険な仕事を始めたんです。」

「さうですか。そんならまあその自由な身を利用して、一生懸命やつてみるんだわねえ。なかに貴方がたは勉強次第で物になるんだから、その積りで一生懸命なさいよ。若しお困りのやうなことがあつたら、私だつて及ばずながら、貴方一人位何とか補助して上げますよ。」

夫人は平常から、さういふ義侠的な、姐御といつた風な氣質があつた。だから前にも、度々そんな風な言葉は、小野も貰つたけれど、その夜は殊にさうした、小野に目をかけてくれるやうな、愛護の感情に充ちてゐた。

「さうですか。それは眞實に有難うございます。僕も奥さんにさうまで仰しやうて頂くと、ほんとにそのお禮の心からだけでも、一生懸命勉強したいと思つてゐます。なかに奥さんにさうした物質的

の御心配をかけなくとも、どうやらかうやら食つて行くだけは、原稿で食つて行けるだらうと思ひますから……。」

「でも、そんなことをしてゐちやあ、十分勉強ができないでせう。だから今の中は、成るべく書くのをよして、みつしり勉強した方がようござんすよ。早くから原稿を書いて、佐々木さんのやうに早く書けなくなると困りますからね。先生も小説を書き始めたのは、四十近くなつてからですよ。貴方などはまだ若いんだから、今の中に勉強して置かないと駄目ですよ。ほんとは少し位のお金なら、私が出してあげてもようござんすから、さうなさい。そしてほんとに偉くなつて頂戴。私、お弟子さんの中でも、貴方に一番……何ていふの……、あの目をかけてゐるんですからね。」

「そのお心は僕にもよく分つて居ります。だから僕も、奥さんのためなら、どんなお役にでも立つて上げたい位に、平常から思つてゐるんです。」

小野は決して空世辭ではなく、この恩師の夫人であり、又愛する人の母である人には、全く「水火をも辭さない」といふ位の、一種の信愛をもつてゐるのだつた。それに今夜は殊に夫人からさういふ愛護の言葉を聞かされて、彼の心はもうたゞ一種の感佩の念に充ちてゐた。

「ほんとに、貴方だけはどんなことがあつても、私の味方になつて頂戴。そしてどうか親身のやうになつて新太郎や淳二の面倒を見て下さい。私そのことを考へると、ほんとに心細いのよ。私がかうして、ちやんとしてゐる中は、まアいいでせうけれど、その中に種々なことが起つて来るでせうからねえ。せめて冬子が男でもあつてくれるとよかつたんだけれど、あれも音楽學校へ入れればようござんすけれど、さうでないともうそろ／＼お嫁にやらなくちやならない年頃ですしねえ……。」

冬子の話が出たので、小野は鳥渡唾を飲むやうにした。そして夫人が、そこで言葉を切つて、前に

置いた火鉢の中を見凝めてゐるのを見たとき、彼はその機に乗じて、何か云ひ出したい衝動に、全身を思はず硬ばらせた。

「冬子さんは、音楽學校へ入れないと、直ぐお嫁におやりになるお積りなんですか。」

「さうでもありませんけれど、いゝ處がありましたらねえ。まあ成るべくならば私も、あの子だけは家へ置いて、新太郎や淳二が大きくなるまで、世話をして貰はうとも思つてゐるんですがねえ。」

さう夫人に云はれると、小野は恰も誘ひの手をかけられてもう堪へかねたやうに、思はず頭へ聲で云ひ出した。

「若し冬子さんを非常にいゝ家へやるんでなく、普通の人のお嫁にやるやうなら、私に下さる譯には行きませんでせうか。」と、小野は一旦言葉を切つて、下を向いて續けた。「今こゝでこんなことを申上げては、非常に失禮だとは思ひますけれど、さう願へたらどんなに幸福だらうと僕はかね／＼思つてゐたのです。それが許して頂ければ、どんなことをしてども、僕は決して他の人に劣らず、冬子さんを幸福にして上げられると信じてゐるんです。だから、外の普通の人にやるんでしたら、どうぞ私にください……。」

小野の眼からは、たゞ一種の感情的な涙が、火鉢の中に灑れ落ちた。

夫人は暫く黙つて、小野の顔を見ずに、下を向いてゐたが、やうやくにして、やはり顔を上げずに静かな聲で云ひ出した。

「さうですか。貴方も、そんなことを思つてゐらしたのですか。そんなにまで思つてゐるのだとは、私、少しも知りませんでした。」

「奥さんも、さぞ厚顔しい奴だと思ひでせうけれど、私としてはいつか奥さんに、この心持をお

打明けして、お願ひを乞ふより外はないと前から思つてゐたのです。」

「貴方まさか冬子には、そんな話はなさらないでせうね。」

夫人は母としての威厳を以て、まづそんな反問を發した。それで小野は夫人が少し憤つたのかと思つて、慌てたやうに辯解しなければならなかつた。

「え、致しません。奥さんに初めてお打明申上げたきりです。そして奥さんが、私の願ひをお許し下さらなければ、それで私は何もその上云はずに、たゞ、今まで通り、お交際を許して頂ければそれでいゝのです。併しどうでせう、到底私のお願ひをお許しなすつて下さる譯には参りませんでせうか。——御拒絶下すつても、私は決してお恨みなんぞ致しません。關ひませんからどうぞ奥さんのお心持を、はつきり仰しやつて下さい。どうぞでせう。絶望でございませうか。」

「いゝえ、」夫人は靜かに首を振つて云つた。「私の考へとしまして、貴方がさうまで思つてゐて下さるなら、冬子も他へ行くより幸福だと存じますわ。そして前に申上げたやうに、家のいろ／＼なお世話をして頂くとするれば、貴方と冬子とが一緒になつて下さる方が、どんなに好都合だか知れせんわ。——私の考へはさうですけれど、併しかういふことゝいふものは、さう無難作に、決める譯にも参りませんからね。まづ何より第一に、當人の心持も聞いて見なければなりませんね。その他いろいろな事情をよく考へた上でない、何とも申上げられませんわ。」

「それはさうです。ですから奥さんのそのお心持を、伺つただけで私は満足です。有難うございました。ではどうぞよくお考への上、冬子さんのお心持も、奥さんからよく伺つた上で、幸福な御返事が頂ければ、私は何より嬉しうございます。どうぞ何分とも、無難なことを申上げたのはお許し下さつて、よろしくお願ひ致します。」

小野は改めて丁寧に頭を下げた。

「さうですね。ではこのことは兎も角も、私と貴方と二人だけの内輪の話にして置いて、よく冬子にも話した上、いづれ、成るべく早く御返事しますわ。たゞ冬子が、何と云ひますかねえ——。」

「私もそれが心配なんです。」

「けれど冬子も、貴方が嫌ひではないらしいから、大丈夫かも知れませんよ。」

「さうだといふんですけれど……。」

「私もよく話してはみますが、若しあの子が不服を云つたら、貴方にも諦めて頂かなければなりませんよ。私もよく勤めて見ますから、大概いゝ方だらうと思ひますけれどね。——貴方もまア氣永に待つ氣で私から返事をする迄、黙つて待つておらつしやい。その中にはきつといふ返事が差上げられると思ひますよ。兎に角、私は賛成なんですからね。——まア今夜は晚いから、さう思つてお寝みなさ

So」

「有難うございます……。」

小野は何よりまづこの夫人が、思ひの外に早く賛成してくれたのを心から感謝しなければならなかつた。

夜が更けて、硝子戸の外の闇は何の音もなかつた。たゞとき／＼裏の方で夜鳥の啼く聲がした。

夫人が去つた後、小野も床に就いたが、さすがになか／＼眠りには入らなかつた。襖一つ隔て、隣室では此方の夫人と小野との談話をも、少しも知らないで寝入つてゐるらしい、四人の令嬢たちの寢息ががすかに／＼に洩れて聞えてゐた。小野はそれを聞き入りながら、その中には冬子嬢の交つてゐるのと思ひ、何とはなしに幸福な温かい思ひに包まれつゝ、眠りに入らうと努めてゐた。